

若年女性のライフコース観形成

—母—娘ペアでのインタビュー調査から—

首都大学東京 細川千紘

1 目的

女性の性役割観やライフコース研究の中では、現在の若年女性は母親と同様のライフコースを歩むことが難しいと指摘されている（岩上真珠 2008）。これからライフコース選択をしていく若年女性はこのような時代にどのようなライフコースを歩みたいと思っているのだろうか（以下ライフコース観とする）。女性のライフコース形成において母親の性役割観やライフコースの影響を受けることが先行研究にて指摘されている（大道和美・山村直子 2000, 相良順子 2002）。そこで本研究では母親の影響に着目して、若年女性のライフコース観形成過程を考察していく。

2 方法

女性のライフコースに関する研究では今日まで量的な研究が多くなされており、質的研究は少なく、また母親世代／娘世代単体でインタビュー調査を行っているものが多い。前述のように女性のライフコース形成において母親の影響が指摘されているが、その影響の程度や過程などは量的な世代間比較や母／娘単独のインタビュー調査だけでは考察できないと考え、そこを補うために母—娘ペアでのインタビュー調査を行う。娘の幼少期から振り返り、お互いの意識変化をふまえ、母親と娘の関係から娘（若年女性）のライフコース観の形成過程を考察していく。

3 結果

ペアでの調査から、幼少期の娘は母親の就業状況によって母親像（母親のイメージ）を形成し、その後、周囲の母親と自分の母親を比較していく中でその内実が変化していくことがわかった。幼少期に母親が就業継続していた場合は、幼少期からその後に母親像にゆらぎが見られたが、母親が専業主婦であった場合は、幼少期から現在まで、あまり母親像にゆらぎがなかった。社会的にのぞまれる、規範的な母親のイメージと母親が実際に歩んできたライフコースが重なっているほど、娘の母親像のゆらぎが少なかったのではないかと思われる。

娘のライフコース観を母親のライフコースに対して肯定的（ロールモデル）型／否定的（反面教師）型に分類すると、完全に分類できず、母親のライフコースを部分的に肯定／否定したグループがあった。こうしたグループは幼少期の母親や家庭のイメージから、周囲の母親と自身の母親を比較し、周囲の母親に対して「足りない」と感じる側面を否定的に捉えていた。そして、そこを補うように自身のライフコース観を形成していた。母親の生き方に肯定（ロールモデル）的であったグループは、自分のライフコースを考えた際に母親に対するイメージが好意的に変化したという共通点があった。

4 結論

母親のライフコースは意図せずとも娘のライフコース観形成に影響を与えており、娘は母親のライフコースをモデルとしながら自身のライフコース観を形成している。娘（若年女性）のライフコース観は母—娘間の対立・妥協・順応といった過程を通して形成される。

文献

神田道子編, 2000, 『女子学生の職業意識』, 勁草書房

相良順子, 2002, 『子どもの性役割態度の形成と発達』, 風間書房